

〔学部共同研究会〕

マス・メディアと世界市民性

ジョン・アーリ* 著
池田 知加**, 坂 なつこ***
松葉 正文**** 訳

「ベトナム戦争，東・中欧における革命的な変化，そして湾岸戦争は，厳密な意味において最初の世界的な政治的出来事である。電子マス・メディアを通して，これらの出来事は同時的・遍在的になった。... 世界的なシティズンシップ（world citizenship）の到来はもはや幻影ではない。たとえ，その確立はまだ遠い先であるとしても」（Jürgen Habermas 1995: 279）。

はじめに

近年，シティズンシップとグローバリゼーションはともに，過程としても言説としても，それ以前の多くのものを一掃してしまった。シティズンシップの場合，国民的シティズンシップの権利を要求する運動は，一つの大陸から別的大陸へと飛び火し，非常に強力になっている（Huntington 1991，「民主化」について）。このシティズンシップの権利への要求と市民社会の諸制度への要求は，旧東欧の中で最も激しく生じた（Murdock 1992）。1989年は多くの点で市民の年を表している。それはパリの臣民が市民であることを要求しながら街道を行進してから二百年後の年である。1989年に多くの多様

な社会における人々が「市民となること，すなわち，尊厳と責任をとらない，権利だけでなく義務をもとまう自由に市民社会において連帯する個々の男性および女性であることを望んだ」（Garton Ash 1990:148）。

さらに1989年はグローバリゼーションの言説が論じ始められた時でもある。グローバルなものに関する分析の指数的な増加は，経済的・政治的・文化的諸関係のグローバルな再構成がありうるということを示唆している。シティズンシップと民主主義への闘争は，1989年のベルリンの壁の崩壊と中国における親民主主義運動において最も激しく見いだされ，それらは世界中に即座に伝達された。グローバルな金融市場，世界旅行，インターネット，グローバルに認知されているブランド，グローバル企業，リオの地球サミット，「グローバルな著名人」など，これらは全て国民国家と国民的なシティズ

* ランカスター大学社会科学科教授

** 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

*** 立命館大学大学院社会学研究科研究生

**** 立命館大学産業社会学部教授

ンシップを部分的に超越しつつある社会的な経験を物語っている。

あらゆる人がある社会の一市民であることを求めているまさにそのとき、グローバルな過程は国民的な市民であることの基盤を掘り崩すようになってきている。拡大しつつあるグローバル化は国民的に基礎づけられたシティズンシップの形態がもはや必要ではなくなっている、あるいは必要ではなくなるだろうということを意味しているのだろうか。それは社会とその境界線のなかで形成された独自の市民の衰退を必然的にともなうのだろうか。想像の共同体が変容しつつあるなかで、マス・メディアはどのような役割を果たすのだろうか。「平凡なグローバリズム」は存在するのだろうか。変容しつつある公共圏と国民国家を越えたシティズンシップにおいてメディアはどのような役割を果たすのだろうか。実際に、「グローバルな」市民は存在するのだろうか、また、その長期的なインパクトとはどのようなものであるのか。

シティズンシップの議論

シティズンシップの社会学は、境界を有する社会の概念を中心にすえている。各々の社会は、その中心で成員の権利と義務を組織化する国家をともなう主権を有する社会的実在であると想定されている。一連の社会的諸関係の大部分は、各々の社会の領土的な境界の中で流動すると見なされている。国家はその社会の領土にわたって司法権を独占している。経済、社会階級の諸関係、政治、文化、ジェンダー、民族(ethnicity)などが社会的に構築されていると想定されている。そうした関係が結合して、そ

の社会の各々の成員のライフ・チャンスを決定的社会構造を構成している。この社会の概念はシティズンシップの権利と義務を享受する者として、人間であることについての西洋的な概念の中心をなしている。人間であるということは、ある特定の社会の一員であることを意味してきた。ブルベーカー(Brubaker)は、人間と社会の二重性がどのように現出するにいたったかについて要約している。「国民的主権という原則の明確化、シティズンシップと国民であることの間の結合の明確化、すなわち、旧体制に特有の媒介的・間接的な諸関係が市民と国家の直截的・直接的な諸関係に置き換わること」(1992:35)。社会はそれに対して義務を負い、社会から権利を受け取る市民という概念を内包している。

このシティズンシップの社会的な概念の最も重要な公式化は、イギリスの福祉国家の形成が最盛期にあった1949年にマーシャルが行った講演に見られた(Marshall and Bottomore 1992, Bulmer and Rees 1996も参照)。マーシャルは社会とシティズンシップの関係を次のように明晰に述べている。「(市民化された生活における)これらの状況を全ての人が享受するという要求は、社会的遺産の共有が許されるべきであるという要求であり、それは翻って、社会の完全な成員として、すなわち、市民として受け入れられるべきであるという要求を意味している」(Marshall and Bottomore 1992:6)。

シティズンシップは西洋において、所与の領土の中で生活する全ての人が直面する国民的なリスク、完全な成員が受容すべきである国民的な権利、ある社会のあらゆる成員に適用される

国民的な義務という見地から認識されている。そのような観念の根底には社会的な統治性，すなわち，「『社会的な観点』からみた統治」(Rose 1996:328)が反映されている。イギリスの文脈では，「ベヴァリッジ(Beveridge)やマーシャルのような制度創設者は，一つの構想を抱いていた。そこでは，困窮に立ち向かう補償が困窮の発生と同じく社会的であって，また一様化された『社会的シティズンシップ』の中であらゆるものを包括する，少なくとも名目上は『普遍的』とされていた給付と保険という手段によってまかなわれていた」(Rose 1996: 345)。

しかしながら，ローズはいわゆるグローバル化が社会的なものにともなう権力の多少の弱体化と，「ポスト国民的な」シティズンシップの発展との一致を意味していると論じている(1994; Rose 1996)。ソイサル(Soysal)は国民的なシティズンシップがますますその基盤を失いつつあり，脱領土化した個人のより普遍的な権利という観念の中に位置づけられた成員のモデルがさらに普遍的になって席を譲りつつあると論じている(1994: 3, Bauböck 1994)。このポスト国民的なシティズンシップはとりわけ多くの社会にわたる出稼ぎ労働の増加，さらなるグローバルな相互依存，異なる種類のシティズンシップに重複する成員の増加，国際的な規約や法(国連，ユネスコ，ILO，EU，欧州評議会，ジュネーヴ条約，欧州人権条約など)によって公式化されている人権に関する普遍的な規則と概念の発生に関係している。

全体的にみてソイサルは普遍的で，一律で，グローバルに規定されている権利と，個別的で

領土的に特殊化されている社会的アイデンティティの間の矛盾がますます増加するようになっていると示唆している。

今日のシティズンシップはまた，漠然と「ポストモダン」として記述されている。明確な権力の独占を有し，見知らぬ他人から成る一つの国民に市民としての明白な権利と義務を付与することができる合理的合法的な近代国家が存在しない場所がある。また，グローバルな過程が社会的不平等を再構築し，多くの国家をそうした流動の「取り締まり人」へ変容させているところもある。企業，ブランド，NGO，多国民的「国家」もまた，いくつかの点で国民国家よりも権力をもつようになっている。華僑のような社会は，国民国家の境界にとらわれない社会を発展させている。ポストコロニアルの時代における多くの社会にみられる全般的にみて雑種のおよび断片的な特徴は，分離的で，競合的で，まとまりのない市民の結果であるといわれているが，ユヴァル-デイビス(Yuval-Davis)によれば，「差異に基づく多段階のシティズンシップ」の秩序である(1997: 12, Bauböck 1994も参照)。

このポスト国民的なシティズンシップと人権のますますグローバルに強化される観念は，様々な社会の中で，また多様な社会にわたって拡張する一連の新たな過程と制度的な編成に由来している。今日の世界において非常に多様なシティズンシップが出現している。それらは以下のものを内包している。

・文化的シティズンシップは，あらゆる社会的集団(民族，ジェンダー，性別，年齢)の権

利を内包し、彼らの社会の中で文化的参加を満たしている (Richardson 1998)。

- ・少数派のシティズンシップは、別の社会に参加する権利と、その社会の中に留まり、適切な権利と義務を受容することを内包している (Yuval-Davis 1997)。
- ・エコロジ的なシティズンシップは、地球の市民の権利と責任に関心を示している (van Steenberg 1994)。
- ・コスモポリタンなシティズンシップは、人々が世界中の他の市民や社会や文化の位置づけをいかにして発展させるかに関心を示している (Held 1995)。
- ・消費者のシティズンシップは、私的セクターおよび公的セクターによる適切な財、サービス、情報を提供される人々の権利に関心を示している (Stevenson 1997)。
- ・移動的なシティズンシップは、他の場所や文化への訪問者の権利と義務に関心を示している (Bauman 1993)。

これらはそれぞれマーシャルの市民-政治-社会という三部構成の限界を示唆している。その三部構成とは均衡状態のシティズンシップと、その社会の長期的な成員の徳によってもたらされた領土の中に居住し労働する人々に帰され、それらの人々に適用される権利と義務のシティズンシップのまわりで組織化されている。対照的に、それに代わるこれらの観念は、多様な境界線を横切る移動性に関心を示す流動のシティズンシップであり、リスク、旅行者、消費者の財とサービス、文化、移民と訪問者のシティズンシップ、そうした移動的な実在が享受すべき権利と義務のシティズンシップである。そうした流動は相互に区別することができない

市民的・政治的・社会的要素に対する脅威と、そのまわりの抵抗を内包している。流動のシティズンシップは、市民的・政治的・社会的な権利と責任を脱差異化している。

次節では、「グローバル・シティズンシップ」のより公式的な本質について論じ、その次の節では、スティーブンソン (Stevenson) が示唆するように (1997: 44)、いかにしてグローバルなメディアが今日の「国民的な文脈から離脱するようになっている趣味・嗜好、習慣、信念の共同体」を育成するかについて考察したい。ある種の平凡なグローバリズムがあるのかどうか、これが公共圏のグローバル化のための文化的な資源を供給するのかについて考察したい。

グローバル・シティズンシップ

第一に、いわゆるグローバルな規模において増大している危険は、以下のものを内包している (Beck 1992; Sachs 1993; Rotblat 1997; Macnaghten and Urry 1998; Adam 1998)。

- ・実験室として地球を扱うこと、および「グローバルな」環境変化の結果生じている環境や健康にとっての「害悪」。
- ・ローカルな文化の諸要素を破壊しうる文化的な同質化 (いわゆる、文化の「コカコロニゼーション (cocacolonisation)」)。
- ・旅行者によって国境を越えてもたさられる病気の発現 (エイズ)。
- ・世界市場の断続的な崩壊、とりわけ、農業生産物。
- ・金融の崩壊とある特定の場所、とりわけ開発

世界における経済的および社会的生活への破壊的な影響。

- ・非常に不安定で、治安が悪く、無秩序な「ワイルド・ゾーン」(たとえば、かつてのユーゴスラビア、ソマリア、合衆国のインナーシティ)の拡散。
- ・(旅行、環境保護、医療サポート、安全な食物などの)専門家システムへの人々の依存。しかしもしそれが日々の社会的経験と素人知識の形態に矛盾するようになると、信頼されなくなるかもしれない。

いわゆるグローバルな共同体の中で参加する権利に関していえば、これらはますます以下の権利を内包するようになっていく(Ohmae 1990; Bauman 1993; Soysal 1994; Bauböck 1994; Held 1995; Kaplan 1996; Pierson 1996; Rotblat 1997; Yuval-Davis 1997; McRae 1997; Castells 1997; Stevenson 1997)。

- ・生来の住人と同等の権利をもって、ある社会から別の社会へ移住する権利と、少なくとも一時的に滞在する権利。国籍や権利を喪失することなく、戻ることができる権利。
- ・ある人が有する独自の文化を持ち込むことができ、少なくともその人独自の文化のいくつかの要素を含む雑種的な文化と別のところで遭遇することができる権利。
- ・世界的な社会の中で全ての社会集団が(情報、代表、知識、コミュニケーションをもちながら)文化的な参加を満たすことができる権利。
- ・多様な別の文化の生産物、サービス、アイコンをグローバルに購入することができ、徐々に変化するある文化の中でそれら別の文化を位

置づけることができる権利。

- ・ある特定の国(フランスの核実験)、国家の配置(北半球)、企業(ニュース・コーポレーション)、一般的な害悪などへ抵抗するため別の社会の市民とともに社会的運動を形成することができる権利。そのような運動はブランド、広告、商業主義をしばしば内包しており、たとえ抵抗的であるにしても革新性を必要としていない。
- ・地球上の国へ余暇のために移住する権利。したがって、あらゆる別の場所や環境(その途上を含む)を「消費する」権利。余暇旅行のために多くの公式的な壁を排除することによって、今日の市民はある場所やあらゆる場所(とりわけユネスコが指定した世界遺産)を消費することを期待している。
- ・身近な原因と遠く離れた原因の双方によって生産された健康と安全にとってのリスクから相対的に自由である環境に住むことができる権利。それは、それぞれの環境の質を直接に感受する権利であって、しばしば信頼できない専門家システムに依拠することではない。また、情報、理解、省察というマルチ・メディアの情報源をとおして、それらの環境について知るための手段を提供される権利。

ますます個人、国家、企業、国際的な組織にとっての責任の感覚が増加している。

- ・とりわけ国際化されている国家的な情報源と映像を通して、世界の状態を理解する責任(Ohmae 1990 参照。ボーダーレスな世界では、国家がますます情報の流動を統制できなくなっている)。
- ・他の環境、他の文化、他の人々に対するコス

モポリタニズムの感覚を表明する責任。そうしたコスモポリタニズムは、世界中のそのような環境を消費することも内包している。あるいは、その広範囲に及ぶインパクトのため、そうした環境を消費することを拒否している (Bell and Valentine 1997 を参照。「地球を料理する方法」、「一つの小さな地球のために料理すること」に抵抗するものとしての)。

- ・生活を維持しながらかけがえのない地球環境に対する配慮という倫理を発展させる方法の多様な観念と矛盾せずに、文化、環境、他の場所を尊重する行動様式をとりいれる責任。その倫理は、日常的な決定に徐々に入り込んでいる。
- ・特定の国民、民族、ジェンダー、階級、世代の市民としてではなく、高度に差異化された世界の市民として人々を扱う映像、アイコン、物語に反応する責任 (世界の色を広告しているベネトン, Szerszynski and Toogood 1999 を参照)。
- ・共有されたアイデンティティの利益によってではなく、苦難を共にする一つの全体としての世界の一部で、行為すべきであると他者を納得させようとする責任 (Hansen 1993a, 1993b; Rotblat 1997)。
- ・ローカルあるいは国民的な利益によってではなく、グローバルな公共的利益によって行為する責任 (Turner 1993:177)。

いくつかの危険、グローバル・シティズンシップの権利と義務について述べる。その公式は図式的で、潜在的な構成要素、とりわけコスモポリタニズムとシティズンシップの関係を暗示しているにすぎない (Stevenson 1997:44 を

参照)。さらに、そうしたシティズンシップが発展する程度は、多様な社会集団や、いわゆるグローバルな市民の社会空間的実践の強調、あるいはそれらの権利や義務を安定させたり、脅威を与えるものの間の闘争に依拠している。私は「グローバルな市民」には七つの類型があり、その社会空間的な実践は、そうしたグローバル・シティズンシップがどの程度発展するかを決定するだろうということを示唆したい。

まず第一にもっとも明らかなのは、ますます「脱国民的」でボーダーレスになってきているグローバルな企業利益の周囲に、彼らの世界を統制しようとしているグローバルな資本家がいるということである。主要な4万の企業やトランスナショナルな企業はどれもグローバルな戦略を追求しており、国際化された科学をますます援用し、新たな危険を一般化するだろう (Martin and Schumann 1997)。第二に、グローバルな資本主義を緩和し、規制し、権利の言説をしばしば援用して彼らの発明を法制化するために科学を用いている (ユネスコ, ILP, 世界銀行, IMF, WHOを含む) 大規模な国際化された組織を率いる多様なグローバルな改革者がいる。第三に、グローバルな管理者としてそのような組織の中で働く人々がいる。彼らは多様なローカルな危険とグローバルな危険を改善するための経営的・科学的・技術的な解決策を実行している。第四に、実際の旅行や想像上の旅行を含む国境を越えた仕事上・職業上・余暇上のネットワークを設立し、維持するグローバルなネットワーカーがいる (Castells 1997; Urry 2000)。第五に、ローカル化された配慮の倫理を通して世界に責任をとる「地球市民」がいる。第六に、しばしば広範囲にわたる旅行の

結果,「他の」文化や人々や環境に対する開かれた態度とイデオロギーを発展させるグローバルなコスモポリタンがいる。その一部は「新たな移動性」あるいは文化的カメレオンとして記述される「グローバルな著名人」を含んでいる(McRae 1997)。第七に,ポスト共産主義の時代に反環境保護主義者の示威行動,メディアや身体的な脅迫を通して新しいグローバルなスケープゴートとして批判され,攻撃される「環境保護主義者」や「政治的適切さ」の信者に共鳴している環境保護の巻き返しがある(Rowell 1996を参照)。

世界の住人にとっての未来の権利を獲得することは,これらの様々なグローバルな集団の配置とそのうちのどれがグローバルなヘゲモニーを獲得するか degree の間の力関係に依拠している。各々の社会的実践はシティズンシップの一つかそれ以上の観念を表現しており,危険,権利,義務の新たな配置の出現をもたらしている。現出しているグローバルな水準において,グローバルな舞台で現在部分的に生じている一連の闘争はどのような結果をもたらすのだろうか。

多くの解説者はグローバルな悲観主義者である。彼らはグローバルな世界は新たな中世的時代精神,すなわち,前近代的な時代へ回帰した「西洋」であると述べている(Cerny 1997)。中世的な世界は明確な領土的境界や「社会の欠如」によって特徴づけられる。そこには中心である帝国と,多くの交差するネットワークである周縁があり,競合する司法権,さらに多言語的な共同体がある(Mann 1986; Billig 1995:20-1を参照;その批判としてはHirst and

Thompson 1996: 184)。新しい中世的グローバルな世界は,包括的な司法権とアイデンティティをともなう競争的な諸制度で構成されているように思われる。国家は競争的な国家として再構成され,そこにはそうした多くの国家にとっての外部的な軍事的脅威が欠如している。したがって,一つのネーションとしての国民(nation)を想像することが困難である。多様な権力を持つ帝国(マイクロソフトやニュー・インターナショナル)は地球を席卷し,彼らの利益において経済や文化を再配置している。グローバルな危険は悪化し(遺伝子組み換え食品のように),人権は絶えず侵害されるだろう。そして,メディアの排他的な権力のために,これに挑戦する再生された公共圏は衰退する。スパークス(Sparks)は「グローバルな公共圏」という用語を廃止し,「帝国主義的な私的セクター」と言い換えるべきであると論じている(1998)。

しかしグローバル・シティズンシップの出現にいくつかの期待を見いだす者もいる。ギデンス(Giddens)は『『他者』のいないところでの問題や機会に直面することによって,いくつかの点で人類は一つの『われわれ』になっている』と述べている(1991: 27)。同様にベック(Beck)も「核や科学的な汚染によって,我々は『他者の終焉』,この他者というカテゴリーの背後に撤退し,我々自身を遠ざけるために注意深く育成したあらゆる機会の終焉を経験している」と論じている(1992:102)。自然科学も同様な観念を展開している。ノーベル賞受賞者のジョセフ・ロートブラット(Joseph Rotblat)は,「国民」ではなく,「人類」への忠誠心が発展するだろうと論じている

(1997a:x-xi)。巨大な世界人口は問題ではない。2億5600万人の合衆国の人々と多くの民族的多様性は所属の強力な感覚を普遍化している。ロートブラットは、それが国民的なアイデンティティではなく「人類」への忠誠心を発展させる中核となる世界の住人の間の相互依存であると主張している。

「コミュニケーションと交通手段における驚異的な進歩は、世界を親密に相互結合した共同体へ変容させた。そこでは全ての成員が彼らの幸福のために相互に依存している。我々は現在世界のいかなる部分でも何が生じているかを即座に観察し、助けを必要としているところに助けを提供することができる。我々を結び合わせるコミュニケーションの多くの新しいチャンネルを活用し、本当にグローバルな共同体を形成しなければならない。我々は世界の市民にならねばならない」(Rotblat 1997a:x-xi)。

彼はグローバル・シティズンシップの発展を強化する一つの傾向とは、「普通の人々の生活において、国境をこえた共同体が果たす役割」であると論じている(Rotblat 1997a:9)。ある程度まで、科学者たち(とそれ以外の学者の集団)は(ノーベル賞やその他の賞を通して)グローバルに認識された報酬をとまなう「疑似国民」であると考えられる。また、近代的なコミュニケーションが発展するにつれて、これらの疑似国民はさらに重要になり、広範囲に及ぶようになっている。さらに一般化すれば、電子コミュニケーションはすでに地理的に拡散した人々の集団が密接な結びつきを形成するための助けとなっている。...電子共同体は領土的な基盤をもっていない」(Rotblat 1997a:16)。これ

らのコミュニケーションは領土に基礎づけられたアイデンティティの古い形態を衰退させ、排除さえすることができる。科学者の中には、電子コミュニケーションが書かれたコミュニケーションに取って代わったように、「境界線を有する領土」に代わる「地球全体」として、グローバル・ビレッジが国民国家に取って代わると理解している者もいる。また、宇宙旅行の想像上の帰結について内省している科学者もいる。宇宙飛行士のウィリアム・アンダーズ(William Anders)は以下のような有名なコメントを残している。

「地球は、とても繊細で有限の美しい装飾品のように、小さく、青緑の天体にみえた...人類の祖先であるその家は、広大で無限で不滅ではなかった...それは適切な配慮で保護し、防御しなければならない繊細でもろい装飾品のように見えた。思い返すと、私は国境も、分離した国家による分割もみなかった。それは教室の中で一つの地球を見るのと同じように、それぞれが異なる色をしているのである。地球は人間によって分割されたが、自然によっては分割されていない」(引用 Menon 1997:28; Rotblat 1997b; Cosgrove 1994)。

メノン(Menon)は、技術と共生している近代科学について以下のように論じている。近代科学は「地球が全ての人類にとって唯一の家である孤独なもろい宇宙船であるということを論証している。しかし国民性、宗教、皮膚の色、共同体、民族に基づく分割によって地球は分裂している。いかにして、近代科学は世界を思想、情報、人々、財、サービスの運動に有効な潜在力をともなう小さな場所にしたのか。いか

にして、近代科学は全ての生命システムの根本的で本質的な唯一性を証明したのか」(1997: 35-6)。より一般化していえば、ハヴェル(Vaclav Havel)が述べているように、いかにして「伝統的な政治の高度なゲームの外側に立っている...市民の国際的な共同体のようなものに依拠したよりよい未来の展望は、...人間の意識現象から現実的な政治的な力を形成しようとしているのだろうか」(引用 Rapoport 1997:97)。

とりわけ、バグウォッシュ会議はグローバルなメディアが重要な役割を果たすことを期待している。なぜなら、映像メディアは「それが描写した世界の出来事に対する情緒的な反応」を引き起こすことができるからである。映像メディアは地域的な相互依存とグローバルな相互依存への意識を強化し、しばしば攻撃的な行為を緩和させるために攻撃的な政府へ圧力をかけることができるからである(Rotblat 1997a: 14; Rotblat 1997b も参照)。ワーク(Wark)も同様に、グローバルなメディアの非日常的な諸制度を通して、人々が一つの「共同体」の一員として自らを想像し、さらには、人間ではない動物と共有されるいくつかの状況にさえ共感すると論じている(1994)。

したがって、グローバルな悲観主義とグローバルな楽観主義があるのである。どちらの場合も、グローバルなマス・メディアはますます生産的な役割を果たしている。次節ではこれらのメディアについていくらか詳細に考察する。

グローバル・メディアとシティズンシップ

シティズンシップはつねにコミュニケーションの過程と象徴的な資源の分配を必要としている(Murdock 1992: 20-1)。印刷物、とりわけ新聞は18世紀と19世紀においてヨーロッパ国家の想像の共同体の発展、公共圏や国民国家の成長にとって重要なものであった。20世紀においては、国民的なシティズンシップの発展にとって、公有のラジオ放送がとりわけ重要であった。マードックが述べているように、「商業的な放送が視聴者を生産物の消費者として認識しているところでは、公共サービスのエートスは、彼らを国民国家の市民と見なしていた。それは現存する文化的な諸制度の設備を普遍化しようとしていた」(1992:26-7)。ラジオの周りで集団化された家族としての視聴者に話しかけることによって、ラジオは家庭と国、父親と祖国の間の強力な想像上のつながりを結合させた。戦時中のイギリスにおけるBBCラジオ放送は英国性という国民的イデオロギーをますます発展させる助けとなった。ホール(Hall)はBBCとは「国民が構成される道具、装置、『機械』であった」と論じている。ラジオは国民に話しかけることによって、国民をつくりだした。それは聴衆を代表することによって聴衆を構築した(そしてもちろんながら、他者を周辺化することによって。1993:32, 29)。

人々や場所や映像によってそうした一つの国民を表現するには二つの方法があった(Billig 1995: 98 を参照)。第一は、描写、正確な言葉で言えば、映像あるいは現象によって、当該の国民の中核となる未来、あるいは本質的な性格を描写するという方法である。第二は、ある

人々や諸制度がその国民を代表して発言するという方法である。この意味で、政府はその大義について話し、行為し、議論しながら、その国民を表現する。明らかにこれらの表現の二つの類型は密接に関係している。国民を代表して話すことは、国民と話し、国民の中心的な性格を特徴づけることを必然的にともなう。描写と代表して話すことはともに公共圏、ハーバーマスに従えば、「世論が形成されうるに等しいような我々の社会的生活の領域」を前提とし、さらにはそれを育成している(1974: 49)。そうした公共圏は公共的な利益についての制限のない自由な討論、公共的なフォーラムの広範囲の適用、表現と討議の自由、合理的な説得と論議の使用を内包している(Cohen 1996; Cottle 1993)。

初期の著作でハーバーマスは、マス・メディアを理性的な批判的公衆の可能性を排除しているために、そうした公共圏にとって有害なものとみなしていた。(Habermas 1989 [初出 1962])。しかし後に、彼はいかにしてラジオやテレビが実際に「生活世界」の資源に依拠して自らを「公共圏のメディア」として成立せしめたかについて詳細に述べている(1974: 49)。とりわけマス・メディアは「時間的・空間的に遠く離れたコミュニケーションの内容を潜在的に存在するネットワークに乗せることによって抽象的な同時性を作り出し、時間的・空間的に限定されたコンテキストの地方性からコミュニケーションの過程を引き離し、公共性を成立せしめるのである」(Habermas 1987: 390)。そうしたメディアは「両義的な可能性」をもち、かつてのフランクフルト学派のメディア分析において強調された商品化、中心化、同質化という

傾向への対抗の多様性を普遍化している(Habermas 1987: 390; Cohen 1996; Cohen and Arato 1992)。ハーバーマスが公共圏の多元的な性格を強調しているように、これは脱中心化、メッセージ間の競合、ジャーナリスティックな倫理の影響、それらのメディアによる直接的な操作への抵抗を許容することができる多元的なマス・メディアから成る(Cohen 1996)。

しかし、ここでは、そのような公共圏としてのグローバル化するメディアの重要性についての取り組みは続けられていない(Dahlgren 1995: 第6章を見よ)。とりわけ、グローバル・メディアの成長は、「グローバルな公共圏」として明示されうる何かを生み出しているのだろうか？また、もしそうなら、すでにその特質は何であるのか、またそれらはグローバル・シティズンシップのモデルにとって意味を持つのかということは、以前に概観された。マス・メディアはいかに世界が描写され、代弁されうるのかという点において、どのような役割を果たすのだろうか。そのような領域は、どのようにグローバル化する市民社会に左右され、それを育成するのだろうか(Keane 1991; Cohen 1996; Thompson 1995; Dahlgren 1995)。

トンブソン(Thompson)は、特に、公的な言説のための新しいフォーラムを創造しうるメディアの貢献について示した。殊に、彼が議論しているのは、次のことである。すなわち、入手したくないかもしれない情報と知識が個々人に供給される際に、まさに「媒介された疑似相互行為が、共有された場所での対面的な相互行為と同じように、あるいはそれほどでなくとも、熟考を促す」ことである(1995: 256)。世

界が相互に連結しているという意識は、私たちに、時間的空間的に離れた人々や場所へ、関心の地平を拡張することを余儀なくさせる。

トンプソンは、主に、ニュースやドキュメンタリーのような、事実や提案、または議論や視点を伝達するメディアのジャンルに傾注する。だが、これは過度に知覚主義的であり、現代のメディアの最も深遠な特徴である圧倒的な視覚的特質を無視している(Szerszynski and Toogood 1999を参照)。現在のマスメディアは、人間の行為が考えられ、形成される仕方を再構成する視覚的イメージの異常な流出から成り立つ。以下で、私が関心を持つのは、「テレビの流出」を創造しながら、プログラムの内部やその全てにわたって存在する視覚的イメージの本質である。それらの視覚的イメージは、多くの人々に、広い意味で一体化、責任あるいは帰属意識を発展させるための文化的資源を提供するだろうか。特に、地球の描写と、その代弁の方法を含むマスメディアについての豊かな映像はあるだろうか。ダイアナ妃の例がまさにこれである。彼女は、地球のそして特にコスモポリタニズムのアイコンだったのであり、そして、地球的大義について語る権威であった。

もちろん、しばしば、それらの遍在する視覚的イメージは、書かれたあるいは話されたテキストを伴っている。そのようなテキストは、話者と特定の観衆とを想像的につなぐ「ささいな言葉の複雑な直示」を伴うであろう(Billig 1995: 106)。ここで、ささいな言葉とは、「私」「あなた」「私たち」「彼ら」「ここ」「今」「この」「あの」である。それらは発言されたことの様々なコンテキストを、直示的に指摘するために用いられるのである。クリントンが「こ

の、人類史における最も偉大な国」と指摘するときに、「この」が喚起するのは、帰属しているネーションの場所、すなわち、その「この」はアメリカ合衆国に関係づけられており、アメリカ合衆国は「人類史における最も偉大な国」とであると認識される習慣的なネーションである(Billig 1995: 107)。「私たち」は、典型的に、話者や直接の聴衆だけを意味するのではなく、日常的な義務や結び付きの場所である、想像のネーションを意味するのである(Stevenson 1997: 45)。

しかし、この直証性は、おそらくネーションに向かって現れるだけでなく、その境界を越えて、より広く想像される諸コミュニティに現れるように見える。マンデラは、規則的に、「南アフリカの、そして世界の、見守っている人々」に言及する(1995: 107)。彼のスピーチのなかの「私たち」は、ほとんど常に、南アフリカを越えたグローバル・メディアを注視している人々であり、集合的に南アフリカの再生に参加してきた人々のことである。マンデラが「私たちは一つの人民である」と述べるときは、彼は南アフリカと、そして世界の他の国々とを指示しているのである。同様に、ダイアナ妃の葬儀の際に、テレビの解説者から集合体である「私たち」へ直示的に示されることの多くは、実際に、世界中からその出来事を見ている推定で25億の人々へと向けられていたのだ。

今、簡単に、様々な映像の規模とインパクトへと話を向ける。それらは、直接的に世界を代表するか、直示をとおして何らかの他のグローバルな方法で、物事を指摘したり、形成したりする。世界は、どのようにして、描写したり話

したりすることによって表現されるのだろうか。何が、上記で概説した種類のグローバル・シティズンシップに文化的資源を提供する「平凡なグローバリズム」と呼んでいるものの証拠なのだろうか (Billig 1995; Toogood 1998; Szerszynski and Toogood 1999; Toogood and Myers 1999)。

1972年に撮影されたアポロ17号の「地球全体」の写真からはじめよう (Cosgrove 1994)。この地球の写真は、計り知れない力のイデオロギー的な、そしてマーケティングのためのアイコンとなった。それは、とりわけ、グローバルな活動を強調するコンピュータ会社や航空会社によって使用された。また、宇宙の暗闇における地球の孤独とはかなさが、それゆえ地球規模で個々人の責務が必要であることを強調する環境保護主義者らによって、さらに、アメリカのアポロの使命を人類の普遍的運命の無上の業績と見なしたアメリカ政府によって使用されたのであった。この地球の写真は、視覚的な表現の驚異的な力を論証している。すなわち、立体的で不透明な地球としての可視的な世界という概念を前提とする。そのような「世界の旗振り」の例は他にもたくさんある。例えば、世界地図に描かれる航空会社の多数の航路の線、世界的ブランドのトレードマーク、衛星放送の足跡を示すためのもの、ベネトンや「コカ・コーラ」のような世界的製品の広告、オリンピックやEUのような国際組織やイベントの「旗」等々である (Toogood and Myers 1999)。

イギリス国内で様々なチャンネルが利用可能な24時間の間に調査をした結果、整然とした「グローバル」な映像が、正規の番組や広告の

いずれの中でも確認された。それらの場合、場面場面が、何らかのグローバルなものとして組み立てられたのである。世界的なものの映像や、特定の環境の映像、すなわちグローバルな市民の行動やアイコンの例は、すべてを特別なものとして、すなわち日常を超越するものとして、通常のテレビ放送の見解を目立たせずにはっきり提示された。明らかに「グローバル」なものとして、その映像をあらわすために、多くの技術が採用された。例えば、国境を気にせずに、環境の状態を捉えるためにカメラの動きを上昇させること。また、多様な文化の多くの異なった人々を結びつけること。また、多様な国々の明らかに異なった場所の並置や、ささいな言葉の直示をとおして変化する呼びかけ方の使用などである (Toogood and Myers 1999)。次のカテゴリーのそれぞれに多くの映像の例が見られた。

- ・地球の映像。境界線や政治的な色彩の無い擬似的な青い地球を含む。場合によっては、地球の指標的なものとしてフットボールも含んでいる。そこではサッカーがグローバルな市民のアイコン的な競技であると考えられている。
- ・一般的な環境 (砂漠、大洋、熱帯雨林) の長い間、通常は空から撮影された映像。それらは、特定の国家を描くというよりも、むしろ地球 (とそれへの脅威) を描写するために必要である。
- ・野生動物の映像。特に、オーラをもつ動物 (ライオン)、虐げられた種 (アシカ科、アザラシ科)、そして環境の全ての状況を示す指標となる種 (ワシ)。
- ・人間の家族の映像。そこでは世界のほとんど

全ての文化の人々が一つの場所で(スポーツスタジアム)みんな幸せになれる,あるいは一つの世界的製品(Coke)を共有できるように見える。

- ・やや異国的な場所や人々の映像(浜辺,現地のダンサー,スキー場),それはしばしば非日常的なカメラの視角によって映されており,グローバルな移動,コミュニケーション,コスモポリタニズムの限らない可能性を示唆するのである。
- ・世界のメディアのなかで,またそれによって有名であるグローバルな選手やその他の有名な人の映像。彼らの行動は(そして悪い行いの場合)果てしなく全世界に掲示される(O.J. シンプソン,マドンナ,エリザベス二世)
- ・アイコンの見本の映像。彼らは,セットや衣装をとおして,グローバルな責任を表現している。そのような人々は世界をあらわしている,そしてそのために行動していると思われている(マンデラ,「心の女王」としてのダイアナ妃,ケン・サロ=ウィワ[ナイジェリアの作家])
- ・グローバル・コミュニティのための根本的な行動に従事している人々の映像。これは,さまざまな文化や場所の混成,あるいは人々の貧窮,餓死,疾病などに遭遇している人々の混成によってあらわされる(赤十字,国連ボランティア,特別警察吏)
- ・地球とその長期的な未来のために行動する企業の活動の映像(環境を守るための水質浄化会社,新しい薬の研究に巨費を投じている製薬会社)
- ・グローバルな報道の映像。それらは世界全体について話し,目撃し,コメントし,解釈することができるアイコン的な人物によって現前

し,実況され,報道されることが示される。

(Kate Adie [BBC] Christiane Amanpour [CNN] John Pilger [ITV])

そこで,ここでの第一のポイントは,ありふれたやり方で平凡なグローバリゼーションと接合する,世界,シンボル,個人,環境,トレードマーク,そして広告の多くの映像があるということである。それは,国家の境界線を越えて,世界の輪郭を指し示すのである。ナショナル・シティズンシップが平凡なナショナリズムを前提としているように,所謂グローバル・シティズンシップは,当然のことながら,世界の平凡な標識の一連の類似を仮定する。それらの映像が「ありふれたこと」になったということは,CNNのワールドビューの番組広告を考えることによって見るができる。たった29秒の間に,多数のグローバルなアイコンや見本が採用されている(Toogood and Myers 1999を参照)。この映像の氾濫は,どのように一日の間に世界中の全ての文化についての観察が,そしてそれへの訴えかけが存在しているのか,ということを表している。例えば,明け方の湖のパゴタ[インドなどの塔],ポリネシア人のダンス,正統派の修道士,砲弾の発射,ホワイトハウスでのレビン首相とアラファト議長,連続する世界的レポーター,夕日のヘリコプター,自転車に乗っている中国の人たち,アクロポリス,そしてワールドビューの地球である。アメリカ人のナレーションは,次のように述べる。「さあ,全てが把握できるグローバルなニュース報道です。アジアだけでなく世界中が分かれます。今日どんな驚異的なことが起きたのかを一緒に発見する,200カ国近くの数千万人が見ているのは,CNNインターナショナルだけです」(Toogood and Myers 1999)。

第二のポイントは、それらのグローバルな表現の多くが、広告の内部で生じており、従って、グローバル化の過程が、しばしばかつては分離していた公的領域と私的領域の奇妙な複合を含んでいることを表しているのである。それらの間の重複の増加が、それゆえ、シティズンシップの問題と現代的消費主義の問題がますます重複することが見られるのである。ステーションソン (Stevenson) は、次のように主張している。「人々はますます、世界市場で品物を購入する能力をととして、市民になってきている。それゆえ、シティズンシップは、形式化された権利や義務があまり重要ではなくなり、外国の食品や、ハリウッド映画や、イギリスのポップ・ミュージックのCDや、オーストラリア・ワインの消費が重要になってきたのである」(1997: 44)。メイジャー (Meijer) は次のことを議論している。すなわち、どのようにしてブランド商品や広告が、文化的でグローバルなものであることを、すなわちコスモポリタニズムとシティズンシップの奇妙な混合を含んでいるものであることを、人々に考えさせる資源を提供しうるか (1998)。彼女は、コカ・コーラが「新しい生活様式とグローバルな文化的価値を理解することの表現と見なされうるだろう」と示唆している (Meijer 1998: 239; Albrow 1996: 147)。

そしてそれらの消費は、抵抗のアイデンティティと結びつけられうる。俳優、ミュージシャン、ブラジルのインディオ、ポピュラー音楽のプロモーター、保護組織、メディア産業などと、アマゾンの熱帯雨林の破壊に対するキャンペーンを支持するためにレコードを買う若い消費者との間には奇妙な同盟がある。人々は、よ

り一般的に、購買することや、Tシャツを着ること、CDを聴くこと、Webのページをネットサーフィンすること、アイコン的な人物のビデオを買うこと等々をととして、自分自身を抵抗組織のメンバー (あるいは支持者) と、思い描くことができる。それらの物品は、代理の「ネットワーク・メンバーシップ」あるいは「消費者シティズンシップ」と呼びうる感覚を用意するのである。

第三に、それらの視覚的イメージは、実際に力を持っている。なぜなら、多くの知覚的な情報源は、信頼できないように見えるからである (Macnaghten and Urry 1998, 科学と狂牛病について、参照)。映像は、「論より証拠」にグローバル化する文化の意味や解釈の安定的な形態を、逆説的にもたらす。特に、それらの映像が何度も何度も繰り返されるときにそうである (Morley and Robins 1995: 38-9, テレビと諸映像について、参照)。それらの映像は、それぞれをローカルな経験に結びつけることができ、それゆえ、本質的に異なっていたり、明らかに結びついていない出来事と現象の意味を理解する、解釈学的な説明の強力な源を提供する (Thompson 1995)。映像は重要であるように見える。ラモネット (Ramonet) によれば、「客観的なものは、私たちに状況を理解させるのではなく、出来事に参加させる」からである (引用は、Morley and Robins 1995: 195)。人々は、アマゾンの熱帯雨林の窮状、ボスニアの戦争、エチオピアの飢饉などについて心配している、想像の共同体の小さな部分でありたいと思っている。しかし、必ずしもそのような出来事の本質や、それらを除去するために真剣にやらなければならないことは何かを理解する必要

はないのである。映像は「育成(cultivation)」と名付けられていたものの蓄積的過程を構成する。すなわち、人々が時を越えて種々の一貫したそしてやむをえない象徴の流れにさらされているような蓄積的過程を構成する(Anderson 1997: 26)。

第四に、視覚的なイメージは、ますます、公共圏を一つの公的舞台へと変容させる。この公的領域の公的舞台への変容は、以前の私的なものと公的なものとの分離を脱分化する(Cohen and Arato 1992; Szerszynski and Toogood 1999)。メディアは、公的に、私的なままであるものに舞台を設ける。全ての個人や社会的諸制度は、その舞台を知ることができる。マイロヴィッツ(Meyrowitz)は、いかにして電子メディアが楽屋裏での準備の時間を許さないかについて論じている(1985)。秘密が守られる、そして私的なままであることはほとんどない。長く舞台裏のまま、ますますボーダーレスになるメディアの詮索の眼に触れられない、ということは非常に稀である。マイロヴィッツは、暴露の魅力、すなわち、暴露するという行為が、暴露されていることをよりいっそう刺激するように見える魅力について述べている(1985: 311-20)。そして一つの暴露は、世界的な報道を目指してまた別のスキャンダルを暴き、攻撃し、生み出そうとする欲求を増大させながら、よりいっそうの暴露の欲求へと導く。この強力な、全く強力な視覚的イメージをとおした悪事の暴露は、誰にでも、どの機関にも起こりうる。この社会的制裁に曝される文化から、逃れられるものは誰もいない。「評判のいい」人物(クリントン)、国家の「ブランド」(フランスや他の国の核実験)あるいは企業の

「ブランド」(年金の不正のスキャンダルに巻き込まれたイギリスの銀行)、すべて特に無防備な象徴資本を構成する。たった1週間で、リオティント、シェル、P&O、プレミアムオイル、ネスレ、そしてICIはすべて、年次総会を開催した。そこでは、異議を唱えるグループが、悪事をはたらいたと認められた企業を暴露し、社会的制裁に曝すために世界のメディアを動員した。視覚的なブランドは、暴露と侮辱で脅かされうるし、すぐに消散されうる。特に、ある基調となる契機において、メディアによって指揮される世界的な監視の権利が存在するのである(大きな公的集会など。Stevenson 1997: 46を参照)。そのようなスキャンダルは、即座に、世界中に伝達される。スキャンダルは、ますます根本を掘り崩されるのを待ちながら国境へと流れ出す象徴資本あるいは権力として、「評判」と評判の機能を脅かす(Thompson 1997)。ナイキの例は、そして全従業員に支払われる「奴隷賃金」のためにそのブランドが脅かされることは、「公的な侮辱と消費者の圧力が、強力な製造会社に対して強力なインパクトを持つことができる」ことを示しているといえる(Dionne 1998)。

メディアはまた、ほとんど全てのことが公的、視覚的に演出されうるパフォーマンスを必然的に伴う。世界がそれ自体を眺める世界的な出来事がある。すなわち、出来事は、世界の舞台に位置づけられる。グローバル・シティズンシップに結びつけられた例は、ライブ・エイドのコンサート、ネルソン・マンデラの釈放、ダイアナ妃の劇的な死と葬儀、リオの地球サミット、北京会議などが含まれる(Albrow 1996:146, Anderson 1997: 172-3)。それらの映

像において、グローバル・シティズンシップのイコノグラフィの中心は、世界的に循環し、認識され、そして消費されるようになった。それらの映像は、世界を直示し、代弁するのである。

最後に、平凡なグローバリゼーションの、そして、その緊急のグローバルな公的領域を生み出すことに貢献する力の様々な指標がある。はじめに、ブレント・スパー (Brent Spar [シェルの石油基地の名前]) のエピソードを考えてみよう。グリーンピースは、メディア・イメージを発展させ、取り扱うことに習熟した抵抗組織である (Hansen 1993a: 157を参照)。ブレント・スパーの場合、「配備された通信機関は何ものにも劣らないものだった。抵抗者は、衛星携帯電話と、フランクフルトのメディア・ベースへ写真とビデオをダウンロードするマック・コンピュータを持っていた。グリーンピースは、世界中の新聞やテレビが派手に扱うニュースを生じさせる映像を獲得するために、専用の写真とビデオのカメラマンを雇用了」 (Pilkington, Clouston, Traynor 1995: 4; Macnaghten and Urry 1998: 68-72)。この使用された特定の映像は、グリーンピースが、海洋破壊の、すなわち世界の自然を表象する海の目撃者を担っているということだった。これは、私が以前に指摘した、長く、しばしば実体のない一般的な環境の諸映像である。グリーンピースのキャンペーンは、ブレント・スパーから世界へと波動したのであり、世界のメディア (その便益を利用するためにグリーンピースによって招かれた) によって記録されたのであった。そうして、グリーンピースは、アイコン的な世界的ヒーローとして、地球を代表したのである。

多くの「越境する活動家」の重要性は、より一般的に、それらの組織を「トランスナショナルな擁護・抗議 (advocacy) ネットワーク」と述べているケック (Keck) とシッキング (Sikkink) によって分析されてきた (1998)。冷戦の時代をとおして、そのようなネットワークの数は莫大な増加を示した。「社会変化を目指す国際的非政府組織」の数は、1953年の102から、1993年には569に、5倍以上増加した (Keck and Sikkink 1998: 11)。擁護・抗議 (アドボカシー) のいくつかの領域には、驚くような増加が見られる。すなわち、「開発」団体の数は10倍になっており、「環境」団体はこの40年間に45倍にもなっている。今や、諸団体が共に人権、環境そして女性の権利に取り組んでいることが、そのようなトランスナショナルなネットワークの半分以上であることを説明している。また、あらゆる種類の国際的NGOが5000近くあるという概算もある (Billig 1995: 131)。

それらのトランスナショナルなネットワークの成長は、利用可能な安い飛行機旅行、メンバーとネットワークの間の非公式なつながりを提供するコミュニケーション技術、そして1960年代の遺産である広範なコスモポリタンの産物から、逆説的に生じたのであった。ケックとシッキングは、次のようにまとめている。

「この十年間に西ヨーロッパ、アメリカ、そして第三世界の多くの地域にわたった行動主義も、非常に増加した国際的な接触も、この変化に貢献している。重要な航空運賃の下落に伴って、海外旅行は富の独占的な特権ではなくなったのである。学生は、交換留学に参加した。平和部隊やカソ

リック使節団のプログラムは、多くの若者を、開発世界で生活したり働いたりするために送り込んだ」(1998: 14-5)。

そのようなトランスナショナルなネットワークによるイメージや情報、そして目撃者としての任務の新しい瞬間的な流れにおける一つの重要な帰結は、国家や企業が、公衆が利用できる情報を決して独占できないということである。特に重要なのは、かつてはあまり動かず、あてにならない郵便システムの上に組織されていた開発世界への、そしてそこからの、それらの流れである。今や情報とイメージは、それらのトランスナショナルなネットワークを結びつけている緻密なコミュニケーションのネットワークに沿って流れることができる。そして競争するメディアと結合して、それらのネットワークは、国家や企業にしかるべき社会的制裁を加えることができる(Keck and Sikkink 1998: 21)。特に重要なのは、環境、人権、開発、女性問題などに関する世界会議の機会の際の、映像と情報の流れである。例えば、1993年にウィーンで行われた世界人権会議には、1500のNGOの代表が参加した。ケックとシッキングによれば、今日生じているのは、「闘争の場としてのトランスナショナルな市民社会、すなわち人々が分断され、相互に争っている場」である。ブレント・スパーの場合に、同様な目撃者としての任務が見受けられた。そして、目撃者としての任務は、世界メディアにおいてそれを代弁することによって、世界中に伝達している際にも見いだされるのである(Keck and Sikkink 1998: 18-20)。

ヒューゴ・ヤング(Hugo Young)は、ブレ

ント・スパーに関する、シェルの後退の長期的な影響をまとめている。すなわち、「ビジネスがあり、政府があり、それらの有害な謀議に対して抗議することに関心を持っている、グリーンピースが世界の市民(the citizenry of the world)と呼ぶものがある」(Castells 1997)。ワールド・バリュー・サーベイは、そのような世界の市民がどの程度発展してきたのかについて、約20の地域で同様の質問を行った。サンプルは、彼らが世界に帰属しているのか、あるいは彼らの国に帰属しているのか、または彼らが現在住んでいる地域や町に帰属しているのかをたずねた(Mlinar 1997)。ほとんどの団体において、およそ半数が自身を「ローカリスト」と見なした。しかし興味深いことは、調査者が、「コスモポリタン」と「ナショナリスト」と評するものの間の比率である。この比率は、スカンディナヴィアや、旧東欧においては低かった(約1:3)。しかし、西ヨーロッパにおいては、比率はむしろ1:1/2あるいは1:2に近い。ベルギー、イタリア、そしてドイツでは、ほとんど同数の人々が自身をコスモポリタンと同様なナショナリストと見なしている。このことは、かなりの数の人々がトランスナショナルな存在の市民として自身を思い描いているということを示唆している。

私たちは、また、男性と女性とその様なシティズンシップのモデルに関しては、区別して位置づけられるだろうと、おそらく予想する。女性は、常に、国民国家に由来するシティズンシップの権利と義務をなかなか受け取ることができなかった。この排除は、国家的なプロジェクトにわたる男性の権力の形式に由来する(「家計」の担い手とみなされた男性のあり方

のように)。多くの社会における女性の権利は、支配的な宗教によって争われてきた。そのような宗教は、家の中から公的領域へ出ようとする女性運動に抵抗し、子どもを生み、育てるという女性の国民的な役割を一般的に強調してきた。女性は、主として、国民的なシティズンシップの軍事的側面からは排除されてきた。近年、少数の国において女性は最前線に加わることが許された。また、女性は平和主義者になりやすく、その社会における非軍事的側面にかかわっていると思われる(Enloe 1989; Walby 1997)。平和主義者とは、バージニア・ウルフの『3ギニー(The Three Guineas)』で述べられているのがよく知られている。すなわち、「女性として、私は国を持たない。女性として、私は国を欲しない。女性として、私の国は全世界である」(1938: 109)。遊牧民的なグローバルな市民に適している女性もいるかもしれない。なぜなら、女性は、より強く戦争に反対するからであり、男性を国民的な武力を伴う紛争のシンボルとみなすからであり、とりわけ省資源と環境問題への関心が強いからであり、そしてシティズンシップの相対的に国家に縛られない概念の優越を他者に確信させようと努めるからである(Billig 1995; Kaplan 1996; Yuval-Davis 1997; Walby 1997)。

結 論

以上から明らかなように、マスメディアの発展は、トランスナショナルな方向でのアイデンティティ、ロイヤリティ、愛着心の意味の変化を予示することもある。私の議論は、次のようなことを意味しない〔すなわち、以下のような諸規定に賛成するものではない〕。シティズン

シップの「ナショナル」な形式は消失してしまった；シティズンシップの「消費拡大化(consumerisation)」は「社会的平等」の点で望ましい；グローバル・シティズンシップはインパクトがきわめて制限されているかもしれないひ弱な花(tender flower)のようなものではない；グローバル・メディアは所有権とアクセスの様式において途方もなく不平等であるとはいえない；私たちは単一のグローバルな社会に住んでいる。

しかし、ここで私は結論的に二つの点を示したい。第一に、平凡なグローバリズムの発展、いわゆるグローバルな領域、そして私たちの惑星の壊れやすい特徴を理解すること、それらのいくつかの帰結である。1979年に、月を人類の共有財産とする条約が制定された。同年、南極条約が人類の共通の関心のもとに、そしてもっぱら平和的な目的のためにこの地域を保護した。世界の文化遺産と自然遺産の保護に関する条約が1972年に、海洋法条約が1982年に承認された(Menon 1997: 32-3)。1999年には、オタワ協定が130諸国によって調印され、地雷の製造と配備を禁止する結果となったといえる。この協定は、特に、ダイアナ妃に率いられ、地雷被害の強烈な映像をグローバルな受難の悲劇的なアイコンとして打ち出す、国際赤十字のグローバル・メディアのキャンペーンの結果であった(Toogood 1999を参照)。

第二に、ここでの議論について懐疑する人々は、T. H. マーシャルを再度熟考する必要があるだろう。彼は、「共有された生活様式」がシティズンシップには必要であると主張した。彼は、趣味・嗜好と生活様式の不平等は、「あま

りに深い亀裂をもたらす」べきではないとした。シティズンシップは「一つの文明で結合された」人々の内部に生じるべきであるとするのである(Hindess 1993: 27)。このようなことは一見逆説的に見えるかもしれないが、グローバルな同質化、消費主義そしてコスモポリタニズムは、現代の世界における社会的分業を「あまりに深く亀裂をもたらすこと」から防ぐための、そしてその軌道におけるグローバル・シティズンシップを停止させないための必要な条件であろう。ほとんどの国民的諸社会の均質的な性質を仮定すれば、その時、グローバル・マスメディアの力による、何らかの「一つの文明へ結合すること」は、逆説的に、グローバル・シティズンシップのひ弱な花を育てるために必要であるだろう。

参考文献

- Adam, B. 1998. *Timescapes of Modernity*. London: Routledge
- Albrow, M. 1996. *The Global Age*. Cambridge: Polity Press
- Anderson, A. 1997. *Media, Culture and the Environment*. London: UCL Press
- Bauman, Z. 1993. *Postmodern Ethics*. London: Routledge
- Beck, U. 1992a. 'From industrial society to risk society: question of survival, structure and ecological enlightenment', *Theory, Culture and Society*, 9:97-123
- Bell, D. and Valentine, G. 1997. *Consuming Geographies*. London: Routledge
- Billig, M. 1995. *Banal Nationalism*. London: Sage
- Brubaker, R. 1992. *Citizenship and Nationhood in France and Germany*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press
- Bulmer, M. and Rees, A. (eds) 1996. *Citizenship Today*. London: UCL Press
- Baubock, B. 1994. *Transnational Citizenship*. Aldershot: Edward Elgar
- Rose, N. 1996. 'Refiguring the territory of government', *Economy and Society*, 25:327-56
- Castells, M. 1997. *The Power of Identity*. Oxford: Blackwell
- Cerny, P. 1997. 'Globalization, fragmentation and governance gap: toward a new mediaevalism in world politics', *Globalization Workshop*, University of Birmingham, March
- Cohen, J. 1996. 'The public sphere, the media and civil society' in A. Sajo and M. Price (eds) *Rights of Access to Media*. The Hague: Kluwer Law International
- Cohen, J. and Arato, A. 1992. *Civil Society and Political Theory*. Cambridge: MIT Press
- Cosgrove, D. 1994. 'Contested global visions: one-world, whole-earth, and the Apollo space photographs', *Annals of the Association of American Geographers*, 84: 270-94
- Cottle, S. 1993. 'Mediating the environment: modalities of TV news', in A. Hansen, (ed) *The Mass Media and Environmental Issues*. Leicester: Leicester University Press
- Dahlgren, P. 1995. *Television and the Public Sphere*. London: Sage
- Dionne, E. 1998. 'Swoosh. Public shaming nets results', *International Herald Tribune*, May 15:11
- Enloe, C. 1989. *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Relations*. London: Pandora
- Falk, R. 1994. 'The making of global citizenship', in B. van Steenberg (ed) *The Condition of Citizenship*. London: Sage
- Garton Ash, T. 1990. *We the People. The Revolution of '89 Witnessed in Warsaw, Budapest, Berlin, and Prague*. Cambridge: Granta Books
- Giddens, A. 1991. *Modernity and Self-Identity*. Cambridge: Polity
- Habermas, J. 1974. 'The public sphere' *New German Critique*, 3:49-55
- Habermas, J. 1987. *The Theory of Communicative*

- Action*, vol 2. Cambridge: Polity
- Habermas, J. 1989. *The Structural Transformation of the Public Sphere*. Cambridge: Polity
- Habermas, J. 1995. 'Citizenship and national identity: some reflections on the future of Europe', in R. Beiner (ed) *Theorizing Citizenship*. New York: SUNY Press
- Hall, S. 1993. 'Which public, whose service?' in W. Stevenson (ed) *All Our Futures : the changing role and purpose of the BBC*. London: British Film Institute
- Hansen, A. 1993a. 'Greenpeace and press coverage of environmental issues', in A. Hansen (ed) *The Mass Media and Environmental Issues*. Leicester: Leicester University Press
- Hansen, A. (ed) 1993b. *The Mass Media and Environmental Issues*. Leicester: Leicester University Press
- Held, D. 1995. *Democracy and the Global Order*. Cambridge: Polity
- Hindess, B. 1993. 'Citizenship in the modern west' in B. Turner (ed) *Citizenship and Social Theory*. London: Sage
- Hirst, P. and Thompson, G. 1996. *Globalisation in Question*. Cambridge: Polity
- Huntington, S. 1991. *The Third Wave*. Norman: University of Oklahoma Press
- Ingold, T. 1993. 'Globes and spheres: the topology of environmentalism', in K. Milton (ed) *Environmentalism*. London: Routledge
- Kaplan, C. 1996. *Questions of Travel*. Durham, US: Duke University Press
- Keane, J. 1991. *The Media and Democracy*. Cambridge: Polity Press
- Keck, M. and Sikkink, K. 1998. *Activists Beyond Borders*. Ithaca: Princeton University Press
- Macnaghten, P. and Urry, J. 1998. *Contested Natures*. London: Sage
- Mann, M. 1998. 'Is there a society called Euro?', in R. Axtmann (ed) *Globalization and Europe*. London: Pinter, pp. 184-207
- Marshall, T. and Bottomore, T. 1992. *Citizenship and Social Class*. London: Pluto
- Martin, H-P. and Schumann, H. 1997. *The Global Trap*. London: Zed
- McRae, H. 1997. 'New York? London? We're all on the move', *The Independent*, July 16th
- Meijer, I. 1998. 'Advertising citizenship: an essay on the performative power of consumer culture', *Media, Culture and Society*, 20: 235-49
- Menon, M. 1997. 'Effects of modern science and technology on relations between nations', in J. Rotblat (ed) *World Citizenship. Allegiance to Humanity*. London: Macmillan
- Meyrowitz, J. 1985. *No Sense of Place*. New York: Oxford University Press
- Mlinar, Z. 1997. 'Globalization as a research agenda', paper given to the European Sociological Association, Colchester, August
- Morley, D. and Robins, K. 1995. *Spaces of Identity*. London: Routledge
- Murdock, G. 1992. 'Citizens, consumers, and public culture', in M. Shovmand and K. Shroder (eds) *Media Cultures*. London: Routledge
- Ohmae, K. 1990. *The Borderless World*. London: Collins
- Pierson, C. 1996. *The Modern State*. London: Routledge
- Pilkington, E. , Clouston, E., Traynor, I. 1995. 'How a wave of public opinion bowled over the shell monolith', *The Guardian*, June 22
- Rapoport, A. 1997. 'The dual role of the nation state in the evolution of world citizenship', in J. Rotblat (ed) *World Citizenship. Allegiance to Humanity*. London: Macmillan
- Richardson, D. 1998. 'Sexuality and citizenship', *Sociology*, 32:83-100
- Rotblat, J. 1997a. 'Preface, Executive Overview', in J. Rotblat (ed) 1997 *World Citizenship. Allegiance to Humanity*. London: Macmillan
- Rotblat, J. (ed) 1997b. *World Citizenship. Allegiance to Humanity*. London: Macmillan
- Rowell, A. 1996. *Green Backlash*. London: Routledge

- Sachs, W. (ed) 1993. *Global Ecology*. London: Zed
- Soysal, Y. 1994. *Limits of Citizenship*. Chicago: University of Chicago Press
- Sparks, C. 1998. 'Is there a global public sphere?' in D. Thussu (ed) *Electronic Empires*. London: Arnold
- Stevenson, N. 1997. 'Globalization, national cultures and cultural citizenship', *The Sociological Quarterly*, 38: 41-66
- Szerszynski, B. and Toogood, M. 1999. 'Global citizenship, the environment and the mass media', in S. Allen, B. Adam, C. Carter (eds) *The Media Politics of Environmental Risks*. London: UCL Press
- Thompson, J. 1995. *The Media and Modernity*. Cambridge: Polity Press
- Thompson, J. 1997. *Scandal and Social Theory*. Mimeo, SPS, University of Cambridge
- Toogood, M. 1998. *Globcit Image Database: Description and Categorisation of Images*. Mimeo, CSEC, Linguistics, Sociology Depts, Lancaster University
- Toogood, M. and Myers, G. 1999. *Banal Globalism and Media Images*. Mimeo, CSEC, Linguistics, Sociology Depts, Lancaster University
- Turner, B. 1993. 'Outline of a theory of human rights', in B. Turner (ed) *Citizenship and Social Theory*. London: Sage
- Urry, J. 2000. *Sociology Beyond Societies*. London: Routledge
- van Steenbergen, B. 1994. 'Towards a global ecological citizen' in van Steenbergen (ed) *The Condition of Citizenship*. London: Sage
- Walby, S. 1997. *Gender Transformations*. London: Routledge
- Wark, M. 1994. *Virtual Geography: living with global media events*. Indiana: Indiana University Press
- Wolff, V. 1938. *The Three Guineas*. London: Harcourt, Brace and Ward
- Young, H. 1995. 'Democracy ditched in waves of escapism', *The Guardian*, June 22
- Yuval-Davis, N. 1997. *National Spaces and Collective Identities: Borders, Boundaries, Citizenship and Gender Relations*. Inaugural Lecture, University of Greenwich

訳者付記

本稿は、John Urry, *Mediating Global Citizenship*, May 1999を翻訳したものであり、原文は1999年5月14日の産業社会学部共同研究会での報告原稿として準備されたものである。原題は、直訳すれば「世界市民性を媒介するもの」とでもなるだろうが、原著者とも話し合った上で日本語タイトルとしては「マス・メディアと世界市民性」とした。

翻訳は、原文の前半を池田が、後半を坂がそれぞれ最初に訳出した。その上で、松葉を含む三者で数回の協議と検討を重ねて最終稿を作成した（なお、その途中で社会学研究科研究生の高嶋正晴氏から有益な助言を得ることができた。記して謝する次第である）。また、文中〔カッコ〕内は、訳者注である。

学部共同研究会（挨拶と討論）

1999年5月14日(金)
学部共同研究室

篠田（産業社会学部長）

本日は、アーリさんを本学部にお迎えして研究会がもてたこと、われわれスタッフ一同大変喜んでおります。「産業社会の変容と市民社会の再生」と題する本学部とランカスター大学を中心とする本研究プロジェクトも、今年で4年目を迎えることになりました。初年度は、B. ジェソップさんを本学部にお迎えし、ジェソップさんや、私、木田（融男）、小幡（範雄）諸先生の報告をもとにしてシンポジウムを行い、一昨年は同じくジェソップさんと松葉（正文）および赤井（正二）先生達の報告に基づく学部セミナーを、さらに昨年は同じくジェソップさんとA. セイヤーさんを本学部にお迎えし研究会を行いました。また、逆に本学部から佐藤（嘉一）、松葉、赤井、国廣（敏文）の4先生が昨年9月に渡英し、ランカスター大学でのワークショップに参加されご報告をされました。そして、本日は、J. アーリさんをここにお迎えし研究会をもとうとしてしているわけでございます。

思い起こせば、この研究プロジェクトを佐藤、松葉、松田（博）先生達と構想し、私がお二人の命を受け研究企画をもってランカスター大学に話にいったのは4年前のことでした。ジェソップさんとは、私が93年度のイギリス

での海外研修の際に知り合いになりまして、このテーマでぜひいつかは共同研究を進めたいと考えておりましたので、勇んで出かけたことをい思い出します。この研究プロジェクトの中心メンバーの一人としてアーリさんにも参加していただきたいとわれわれ思っていたので、アーリさんにもこのとき氏の研究室でお会いいたしました。非常にでっかい人だな、とまづびっくりしたことを思い出します。

私にとってアーリさんとは、なんといっても The End of Organized Capitalism の著者としてのアーリさんです。現代の資本主義は、大きく変動している。経済を主導するのはもはや製造業ではなく、サードセクター。そこでの労働者はもはやかつてのように組織された労働者でも、肉体的労働者でもなくなっていくだろう。したがって、組織された労使の妥協、また大きな政府による調整を特徴とするこれまでの組織された資本主義は消え現代資本主義は経済的、文化的にも大きく姿を変えていかざるを得ない。それをアーリさんは脱組織資本主義論として展開されました。アーリさんの、こうした主張はネオ・コーポラティズムの国、スウェーデンを研究していた私などには、少々刺激される議論でしたので気になっていた人でした。したがって、その時氏にお会いし、この問題につい

て議論したことを思い出します。それだけに今日アーリさんをお迎えして研究会を持つことはある意味では感無量であります。

少々、私的な感想じみたお話から挨拶を始めることになってしまって申し訳ありません。研究プロジェクトのお話に戻ります。4年前からはじめたプロジェクトですが、この4年間の間に市民社会論のルネッサンスが欧米で、さらには近年では開発途上国で急速に進んでおります。日本においても同様です。このことは、われわれのテーマがいかに関心をもっていたかをあらためて証明していると思います。

この間のわれわれの議論についてですが、大変変わりがあるものだったと思います。と同時に、日本側の議論とランカスターの研究者の議論の間には、少し市民社会の論じかたにおいて違いがあることも明らかになってきたかと思われます。ジェソップさんは国家論的パースペクティブから市民社会を論じておられます。したがって、現在おきている市民社会の変化はもっぱら国家の変化の文脈において捉えられていく傾向があります。日本の研究者の側は、それに比べてそもそも市民社会とは何かと問いつけるところから議論がたてられていきます。その上で、市民社会の企業社会への転化という日本に固有な事態に焦点をあて企業社会論的パースペクティブから規範論としての市民社会論を問題とするという傾向にあります。この点は、あらためて両者の側に国家、市場、市民社会というトリアーデをどう捉えるべきなのかという課題に答えることを迫っているかと思います。その際、グラムシのヘゲモニー論が重要であるということが共通して浮かび上がってきたかの様に見えると思います。といってもアーリさんはグラムシアンではないと言われていますが。

さらにいえば、他にも違いがあります。ランカスターの研究者に共通する前提は、市民社会論はグローバリズムの文脈を抜きにしては現代では語り得ないとおさえられていることです。逆に、日本の研究者が市民社会を問題とするとき、日本における市民社会のありかたといった一国レベルにおいてそれを語りがちです。これまでの日本での市民社会論がそうでした。それをわれわれは引きずっているかと思われます。そこには、市民社会を論じる際、両者が背負っている現実世界の違いがあるともいえます。EUが、そして国家を越えるEU市民権が現実化しつつあるヨーロッパ社会の現実がグローバル市民社会論を課題とさせているのだといえます。しかし、日本においても坂本義和氏が『相対化の時代』において、グローバル市民社会論を説いてこれまでの日本的市民社会論を越えようとしている動きには注目していいかと思います。この点は、この研究プロジェクトにおけるわれわれ日本側の課題ともいえます。

これまでのワークショップや研究会での報告については『立命館産業社会論集』に順次掲載されてきました。詳しくは、バックナンバーを参照していただければと思います。

本日のアーリさんのご報告も、市民社会をグローバルな視野から捉えられ、その上でその形成におけるメディアの役割に注目されています。有意義な議論が展開できればと思います。今後もさらに研究交流が続くことを祈念しまして、長くなりましたが挨拶に代えさせていただきますと存じます。最後になりましたが、経営学部の原(陽一)先生には、いつも通訳の労を取っていただき恐縮しております。あらためてお礼申し上げます。

司会（松葉） 今日の報告に対して、意見や質問をお出しいただきたいと思います。

佐藤（嘉） globalizationやmediaの発達と伝統的な社会理論の守備範囲の関係についておさらいをしてみたいと思います。経済学、社会学、政治学または国家学という3つの伝統的な学問は近代社会分析のトリアーデ・モデルを作ってきた。その基本的な概念枠組によって、われわれはアーリ先生が指摘された現在のglobalizationの問題やmediaの発達の問題を解決できると考えるべきなのか、それとも新しいアイディアによる新しい概念枠組の構築が急務であり、政治学、経済学、社会学の伝統理論は崩壊したと考えるべきなのか。簡単なイエス、ノーでコメントをいただきたいと思います。なぜそういう質問をしたかということ、大分以前にわれわれはアーリ先生の『資本主義社会の解剖学』を翻訳したのですが、国家、市民社会と経済のトリアーデがそれなりに内部的体系性と相関関係を保持しているものとして、理論的に分析されていたと思います。しかし今日の話はこれらの内部条件の外側にある変数が独立変数として指定されていると思いましたので、厄介な問題になったなと思うわけです。質問の動機はそこにあります。

Urry 最初の部分ですが、今までの社会科学が無意味というつもりはありませんが、しかし、この間のglobalizationやmediaの発達という新しい動向がもたらした重要な帰結、影響を切り捨てることはできないと考えます。とりわけメディアのもたらしめている、より重要な影響については見逃していることが多いのではないかと考えます。その中で特に、人々が自らの存在を規定するために行うidentificationのさまざまな形に、いろいろな多様性があるということな

どは、どうも見逃されているのではないかと考えます。こうしたことが言えるとなると、国家、市民社会、経済というトリアーデのモデルのあり方にも関係は出てくると言わざるを得ないだろうと思います。

市民社会のことを考える時、一つ、事実として、アメリカでこの間、注目されてきましたcultural turnの問題に注目したいと思います。これによって従来にも増して、さまざまな言説が与える言語学的な影響への注目が集まっている。イメージやシンボルに媒介されて機能する想像力の役割が大きいということが強調されると思います。

木田 ジェソップ先生が来られた時、市民社会の概念をめぐって、私たちの会で、ハーバーマス対グラムシ、ハーバーマスの見方の市民社会、ニュー・グラムシアン的な見方の市民社会ということで理論的な討論をやった覚えがあります。興味深いものでした。その議論をmediaによるcitizenshipのglobalizationを当てはめた場合、ハーバーマスの考え方をとるとした時に、citizenshipというものが、ある種の公共性をとる場合、ハーバーマスなら理性的な形でのつながりあい、言葉、言語、言説によるコミュニケーション、その合理的な合意を作っていくわけですが、それに対してアーリ先生の場合イメージなバーチャルな視覚的なものがglobalizationの中で、人をつながりあわせるということを述べられたと思います。ハーバーマスの視角でglobalなcitizenshipを言った場合、どのようなつながり方、人々のコミュニケーションのあり方があるのか。言語によるコミュニケーションではglobalizationという形では難しい問題を持つと思いますが、media、とりわけ視覚的なバーチャルな考えが可能性を持

つとお考えなのか。ハーバーマスの理性的なものとは違うものが有効性を持つのかということのを伺いたいと思います。

もう一つは、初歩的な質問ですが、市民社会のニュー・グラムシアン的な捉え方であるヘゲモニー・プロジェクトとそのアーティキュレーション、すなわち単純にいうとヘゲモニーの争いという提起をglobalなcitizenshipの場合で考えると、さまざまなヘゲモニーの争いがあると思うのですが、その問題はどのようにお考えでしょうか。私たちは今日直接ユーゴスラビアに見るような国際的紛争を目にしているわけですが、citizenshipのglobalizationということ、を、国家、経済を考えた場合、ヘゲモニーの争いというレベルでどのように解決しようとお考えですか。

もちろんNGOなどのcitizenshipのグループの中でさえ、ヘゲモニーの闘争があると思いますが。グラムシ的な形で市民社会論をここにあってはめた場合、ヘゲモニーの争いをどのようにお考えで、その解決をどうお考えか。

Urry 最初の点ですが、もともとハーバーマスの議論の中では、言語というものが強調されていましたが、ペーパーの中でも申しましたように、初期のハーバーマスはmediaの役割に否定的な見方を他の論者たちと共にとっています。それが後期になりますと、むしろmediaは市民社会における議論を行う構成者、担い手として積極的な役割を認めるという変化をしてきました。私としては、理性、科学というものがすべてここで消えるのだということを言うつもりはありませんが、社会科学、それにかかわる言説がmediatization, mediatizeという過程を経つつあると考えているわけです。私のこの間刊行しました共著の中でも、その点に触れておりま

す。さまざまな社会現象の結果を決めるにあたっての視覚的なイメージが果している役割が高まっていることを強調しています。その例の一つとして、グリーンピース団体によるmediaイメージを取り上げています。したがって、理性的、科学的な議論の領域は確かに従来通りあるわけですが、そのありようがmediaの発達によって変容してきている。mediatizingという現象の中に従来の理性、科学の議論が詰め込まれている。インベントされているということが今、私の考えている構図です。

それに関連しましてpublic sphereの問題ですが、公共圏、公共の領域と言われながらも、実際には歴史的に見ますと、万民に向かって開かれていたものではなく、18世紀末、19世紀の場合であってもサロンなどに行くことができた金持ちの男性という限定的なものであったことは見ておく必要があると思います。しかし知的な隠されていたものを万人の前にさらけ出し、公共のものにしてしまうmediaの役割は注目に値するのではないかと思います。あらゆる社会においてスキャンダルが日常的に出てきている。スキャンダルを引き起こすmediaの役割、一国の社会生活にとってもらたす帰結については社会的に注目されているにもかかわらず、必ずしも私自身、学問的研究はそれほど見ておりませんが、今後、求められるのではないかと思います。

篠田 globalな市民として自分自身をidentifyできるような状況が生まれてきていると思います。しかし私自身を考えると、にわかに自分を地球市民としてidentifyできない。どこかに一方でコミュニティ、あるいはもっと小さい領域・諸関係において自分をidentifyできる確かな基礎を求めている。現代社会の最大の課題

は、個々人のidentificationがどこに求められようとしているのか、あるいは求めるべきかといったことにあると、私は考えています。実はglobal市民として自分自身をidentifyするためには、一方でこうした回路がその基礎にあるのではないのか。そんな気がします。

Urry 今の問題は重要でして、論考の終わりのところでそれに関係する研究を紹介しています。あるヨーロッパの人々に対して「あなたは自分の住んでいる地域、国家、地球のいずれにより強くidentityを感じますか」という質問です。限界のある研究ですが、しかし興味深いことは事実です。その結果は、大半の人々は自分の住んでいるローカルな地域に愛着を示している。一部の国ではそれと並んで国よりも地球全体にidentityを感じると。ここではよりローカルな何らかの実態、より広範囲な実態に対するidentificationがどういう関係にあるかについてはもっと研究が必要であろうと思われます。私たちの共同研究では、ある調査対象の人々に対して、グローバルなものを表すイメージを見せよう。その後で、ローカルグループに分かれて自分たちにとって何にidentificationを感じるかについて議論してもらおう。その結果、ローカルなものに対してidentificationを行っている人たちが多くなっています。ただし、その場合、ローカルと言ってもいろんなレベルのローカルな実態があります。一つの町に決まっているというわけではありません。ローカルなものに愛着を感じる人々の多くが、同時にそれとかかわりのある国際的な組織、実態に対してもidentificationを持つ。たとえば環境保護団体の活動に、自分の住んでいる地域、ローカルにかかわっていて、それにidentityを感じている人が同時にその団体が持っている国際的なネッ

トワークにidentityを感じる事例が出ています。多くの人々は異なるレベルのidentity, identificationの中をいったりきたりしている。その間の移動性が認められるのではないかということが人々の観察であります。

中谷（義） 本日のテーマとかかわって質問します。「グローバル・シティズンシップ」の必要性があることはよくわかります。D・ヘルド（Held）教授は『民主政の諸類型（Models of Democracy）』と『民主政と世界秩序（Democracy and World Order）』のなかで、「地球市民型民主政（cosmopolitan democracy）」の概念を提示しています。これは、1648年に始まる「ウェストファリア・モデル」にあつては、国民国家型民主政が、つまり国民国家をひとつの所与として、いわばひとつのコンテナと考えて、そのなかで民主化を期するという考え方を超えて、グローバルなレベルで民主政を構築する必要があるとする考え方です。マーシャルが指摘しているように、確かに、先進資本主義国を中心として18・19世紀の自由権的基本権と政治的権利が、さらには20世紀に入って社会的権利が民主的諸権利として累積されてきました。だが、ヘルド教授が挙げている「権力の7つの場」で考慮すると、国民国家レベルでは解決できない諸問題、例えば、環境・労働力移動・多国籍企業など、国民国家レベルの民主的規制では解決し得ない問題があまりにも大きくなってきています。したがって、何らかのかたちでグローバル・レベルのガバナンスを考えなければならないことになります。

また、ジェソップ（B. Jessop）教授が指摘しているように、グローバル化のなかで脱国家化（de-statization）の動きも見られま

す。したがって、今やどういう「グローバル・ガバナンス」を展望するかが現代的課題となっていると思います。この点で、「グローバル・シティズンシップ」には重要なものがありますが、「シティズンシップ」は国家や「ガヴァメント」を離れては成立し得ないとしますと、「シティズンシップ」のインパワーメントの主体や機関が問題とならざるを得ません。つまり、誰が、あるいは何が「グローバル・シティズンシップ」のインパワーメントの主体になり得るのか、主体をどのように形成するか、これが問われることになります。この点で「グローバル・シティズンシップ」は「グローバル・ガバナンス」を前提とせざるを得ませんが、「世界国家」や「地球政府」が存在しているわけではありません。我々は、さまざまなレベルでアイデンティティーをもっています。かつ国民国家は存在しています。また、アジアには、日本には、EUと違う状況もあります。このように考えますと、「グローバル・シティズンシップ」と「グローバル・ガバナンス」とが、どのような関連にあるかが問題とならざるを得ないと思いますが、両者の関連についてご意見を伺いたいと存じます。

Urry 私自身、話を聞いて、本を読んで「cosmopolitan democracy」の概念から大きな刺激を受けてこの分野の研究をしてきた経緯があります。国家のレベルでは解決できない多くの問題があることはその通りです。今日、国家の役割について最も重要なことの一つは、それらが何らかの財やサービス、便益の提供者としてよりも、人の流れ、金の流れ、さまざまなアイディアや情報の流れというもののレギュレーター、規制者としての役割を果たしているという点です。今日では議論の上でも、governanceに

着目するシフトがみられると考えられます。国家はそれだけでgovernmentを構成するのではなく、他の諸団体、諸勢力と協同して結果としてgovernanceを実現するものになっている。そうさせようと努力しているものとみなすことができるだろうと考えます。またgovernanceという行為、現象が、国家のレベルを越えて行われることも確かです。ただglobal governance なる言葉は私としては好んでいません。単一の中心というものが指定されて、そのセンターからすべてが強いられるというイメージが、強くその言葉から伝わってくる印象を受けます。そういう発想をとっていませんので、global governance は用いていません。ただ、現実を見ますと、互いに密接なかかわりを持っているさまざまな主体、民間の会社、NGO、国際機関やメディア機関それ自体なども全部あいまって、ある意味ではこういう言葉を使うことをお許しいただけるなら、trans-nationalなgovernanceという現象、機構の一部をなすものになっていると思います。これらの中に個々の国民国家もその一つ、一要素として含まれていると考えています。

このように想定したtrans-nationalなシステムを考えると、範囲が広いわけですから、土台、前提にはさまざまに異なった文化、さまざまな活動、identityが含まれている、その上に載ったシステムとならざるをえないと考えます。メディアの発達がもたらす興味深い帰結として、こうしたゆるやかなtrans-nationalなgovernanceにとって用いられるうる文化的な資源のうちの少なくとも一部はメディアが提供することができるのではないか。意図してか、結果としてかわかりませんが。私は、大前研一氏がいうような中心から世界政府が全世界に統治を行うとい

ような考えはとっていません。

Onuf public sphere の大きさの問題です。public sphereは基本的には狭い範囲のものであった。範囲が限定されることと引き換えに、それに帰属する主体の責任は重大なものになる。その領域が拡大されるに伴って、それを構成する人間の主体の責任はより曖昧なものになるというトレード・オフ関係がある。アーリ先生の理論で、その領域の範囲と責任の重さの問題はどんなふうにお考えですか。

Urry 今のご質問も難しい問題で、yes, butという感じですが。人間の行動の過程で生じてくるかもしれないフリーライダーの取り扱いの問題等々の前提が入ってこざるをえないだろうと思います。過去30年なりの経験的な証拠となりうるものを引っ張り出しますと、従来に比べて大人数の人たちが、さまざまな政治的、社会的な行為に参画することが行われてきました。それが単に功利的な計算だけでは何でそこまで社会行動、活動に参加するかということが説明できないものがあると思います。今すぐ浮かんでくるのは非伝統的な慈善団体、life aidという寄付行為を行うとか、ご質問に直接答えるものにならないかもしれませんが、こういう形で大勢の人間が社会的な取り組みに参加していることは手がかりになるのではないかと思います。

mediaとpublicityの関係も考える手掛かりになるのではないか。その中で市民各人のidentificationがどのような影響を被ってきたか。今後被ってくるかということもあわせて考えるに値すると思います。正面からの答にはならないと思いますが。

司会 それでは最後に佐藤先生からまとめの挨拶をよろしくお願い致します。

佐藤（嘉） どうもありがとうございました。

大変刺激のお話でした。二つほど印象深いものがありました。一つは、1989年以来グローバルイゼーションという概念が統計の数字の上で急上昇したというお話です。そういう意味で1989年を境目としてこれまでの社会科学概念では問題が解決できないような社会的・文化的諸現象が多発してきている。1989年は私がドイツに留学していた時で、ベルリンの壁が崩れた年です。ある小さな駅で、青い服を着て黒い帽子を被っている父と子の二人連れに出会いました。どこから来たのかと聞くとベルリンから来たという。東から逃れて来た大量のフリュヒトリング（Flüchtlinge、国外亡命者達）の一事例といえはそれまでですが、途方にくれた二人の姿を思い出します。また同時に、ドイツの各地でトルコの労働者がたくさん働いているのを見ました。「国民国家」と言われるこれまでの陣地戦の枠内で縫い張りされていた事態が崩れたということです。社会科学はglobal citizenship問題として論議せざるをえない新しい問題状況に直面していると私も思います。global citizenshipの重大性については今日の話の中で、大変よく理解できたし、この点についての認識はみなさん同じなのではないでしょうか。

もう一つ、今日の青い地球とフットボールの話が印象的でした。昨年私どもがランカスター大学に行った折に、そこに留学しているトルコのドクター論文を書き終わった女子学生と話し合う機会がありました。青い地球には国境線とかフットボールのような筋目がない。飛行機からみるとどこに国境線があるのかと思いますが、降り立てばガンとしてそれは存在します。国境に近い町には、必ず税関があります。垣根があるわけです。トルコの女子学生がたずねる

には、あなたはフットボールのファンか。日本ではこの頃、サッカーが盛んだと返答すると、トルコでフットボールの愛好者は近代主義者で「ボールをとる」とのことです。グラスルーツの民衆の文化から「離れ」てしまう。自分の民族的な魂を裏切ることになるのだという。グラスルーツ・デモクラシーとグローバリゼーションは大変やっかいな問題だなということを理解しました。

そこで最初に質問した問題とかかわるのですが、伝統的な社会科学として成立した社会学、経済学、政治学のそれぞれの根本概念はある実体的根拠を持っていたと思います。国民国家、国民経済、国民社会という3つの円環の交叉の中で様々な権利と義務がビルイトンされ機能していた。global civilizationの進展にともなって、それでは解けないような様々な問題が生まれてきた。例えば、巨大なカンパニーが、労働力の安い国外に資本を移動させ、そこで収益を得ても本国には収益を還元しない。こういう問題も出てきている。今日問題になりましたメディア化の問題、global citizenshipをメディア化する主体の問題、今日はメディアについてのご説明がありましたが、おっしゃるとおりメディアの機能と本質についてしっかりした認識をしていく必要がある。文化資本の問題、象徴資本主義の問題です。今日のお話では社会科学

のcultural turn、社会科学における言語学的な転換の意義については我々も承知しています。しかしこれは社会科学の従来の概念枠組とどういうふうに結び付くのか。今後考えてみるべき新しい論点を共有できたのではないかと思います。

司会 これで研究会を終わりたいと思います。アーリ先生ならびに参加者の皆様、どうもありがとうございました。

< 編集後記 >

B・ジェソップ、A・セイヤー両氏につづいて、ランカスター大学社会学科教授のJ・アーリ氏を招いての学部共同研究会が、1999年5月14日に学部共同研究室で開催された。研究会には教員・院生を中心に約30名が参加し、実り多い報告と討論が行なわれた。

その共同研究会の記録として、今回は、報告部分には事前に提出された原稿を訳出し、それに学部長挨拶と討論を加えることとした。

当日研究会に参加された方々、とりわけこれまでと同様今回も通訳の労をおとりいただいた本学経営学部教授原陽一先生、討論に御参加いただいた同法学部教授中谷義和先生および同国際関係学部客員教授Nicholas Onuf先生に、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。

(松葉 正文)